

■順応する社会

丹沢山地周辺でさかんに陥し穴が掘られていた時期とほぼ同じ頃、^{なかやしき}中屋敷遺跡（大井町）では円形の土坑が多く掘られていました。これら土坑群を掘った人たちは、土器や石器とともに炭化物を今に残してくれました。とくに9号土坑では炭化物が土坑内にまとまって堆積しており、その中から炭化したイネやアワ・キビ、トチノキが発見されました。

中屋敷遺跡から出土した炭化イネは、現在、東日本地域で最古級の資料となります。そして、炭素・窒素安定同位対比分析により、このイネが水稻で得られたものということがわかっています。

中屋敷遺跡に暮らした人々は、周辺で^{たくえつ}水稻耕作を行っていたとも推測されますが、炭化した穀物点数は、イネが400点弱に対し、アワは2,000点弱と卓越した状況を示します。この対照的な出土量から、中屋敷の人々はアワを主体とした雑穀の栽培に力を入れていたと推察されます。

50. 中屋敷遺跡北調査区の遺構分布図



51. 第9号土坑焼土・炭化物の出土状況



52. 出土した炭化種実（上・左下）と現生アワ・キビ（右下）
（種実写真横の黒い線は1mmを示す）

さらに、イネやアワ・キビの他に炭化したクリやトチノキも検出されており、弥生時代前期後半をむかえたとはいえ、縄文後・晩期から培われた植物質食料の利用を受け継ぎつつ、イネやアワの栽培をとり入れ、暮らしを営んでいたのでしょう。

■集う、^{とむら}吊う、つながる — ^{さいそうぼ}再葬墓 —

イネやアワ・キビの穀物が広く暮らしに浸透していく時期に、土器を用いた再葬墓といわれる墓制が展開します。再葬墓とは、遺体を一旦埋葬するなどして骨となるのを待ち、その遺骨を土器に納め、さらにそれを土坑に埋納するという墓制です。

再葬墓は、関東・中部地方や東北地方南部に広く見られるもので、縄文時代から弥生時代へと移り変わる時期にさかんにつくられました。



57. 及川宮ノ西遺跡（厚木市）の第5号弥生土壙土器出土状況（上）と第7号弥生土壙土器出土状況（下）

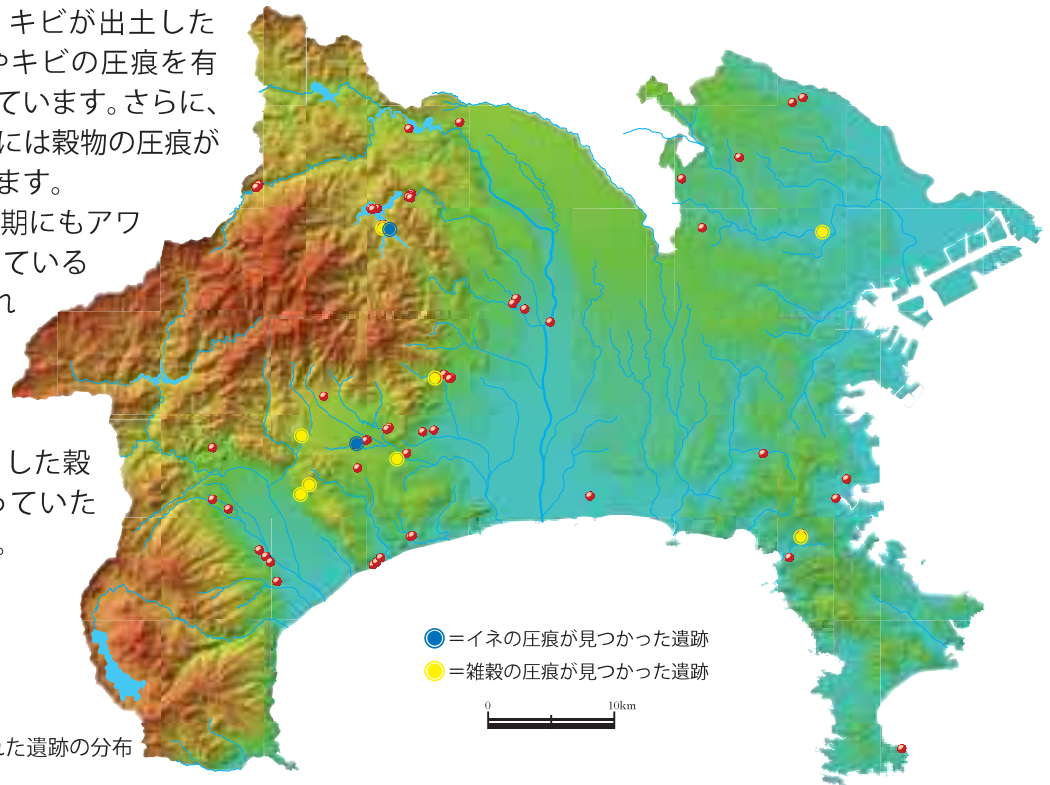


58. 新羽浅間神社遺跡（横浜市港北区）の2号土器棺検出状況（左）と小型壺出土状況（右）

■神奈川県域に広がる穀物の痕跡

炭化したイネやアワ・キビが出土した中屋敷遺跡では、アワやキビの圧痕を有する土器も多く見つかっています。さらに、中屋敷遺跡の他にも県域には穀物の圧痕が確認された遺跡が分布します。

縄文時代晩期後半の時期にもアワやキビの圧痕が見ついているものの、その数は限られるのに対し、弥生時代前期後半には圧痕の検出点数が増えます。広く暮らしの中に雑穀を中心とした穀物が浸透しんとうした生活を送っていたといえるかもしれません。



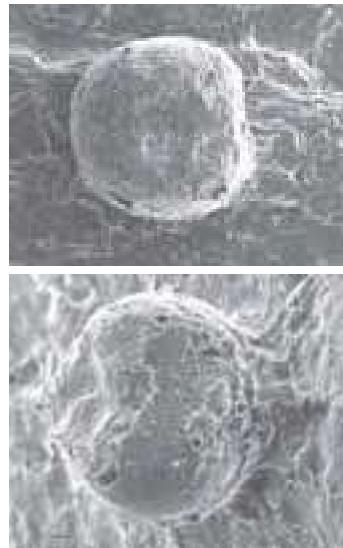
53. 穀物の圧痕が確認された遺跡の分布



54. 上村遺跡出土の粃圧痕をもつ土器



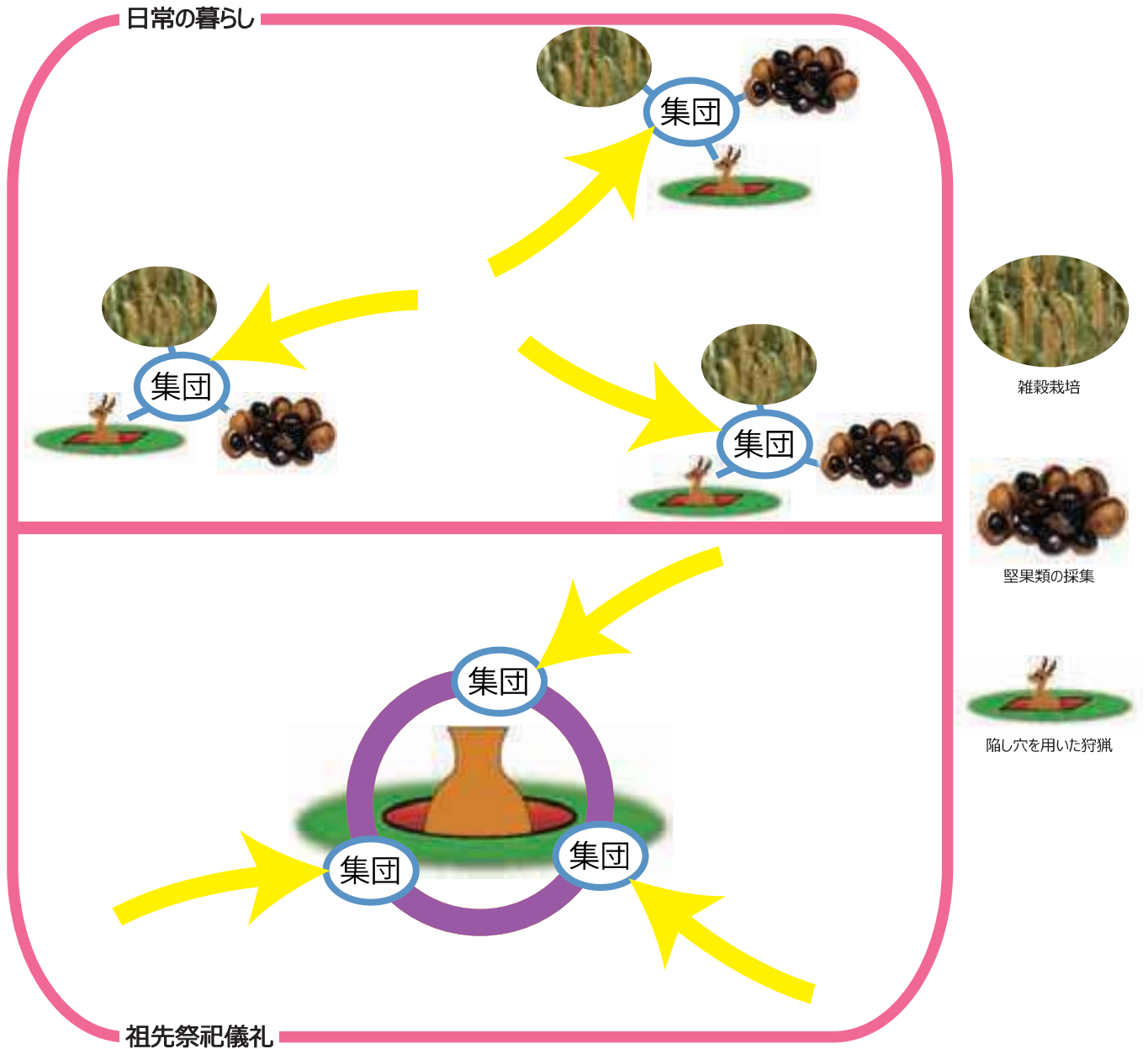
55. 粃圧痕の拡大写真



56. 子易・大坪遺跡出土のアワ圧痕をもつ土器と圧痕レプリカの電子顕微鏡写真

当時の人々は、再葬墓をつくるという行為に重要な意味を持たせていたと考えられています。ここまで見てきたように、日常の暮らしでは小さな集団に分かれて、生活の場を移しながら、縄文時代以来の植物質食料の利用を続け、陥し穴を用いた狩猟に励み、アワ・キビなどを栽培していました。

そして、再葬墓をつくるという非日常的な行為（葬送儀礼^{そうそうぎらい}）を実施する場面では、分散していた集団がひとつの場所に集まったと推測されています。結集した人たちは、赤の他人の集まりではなく、祖先を同じくする集団であったと考えられています。



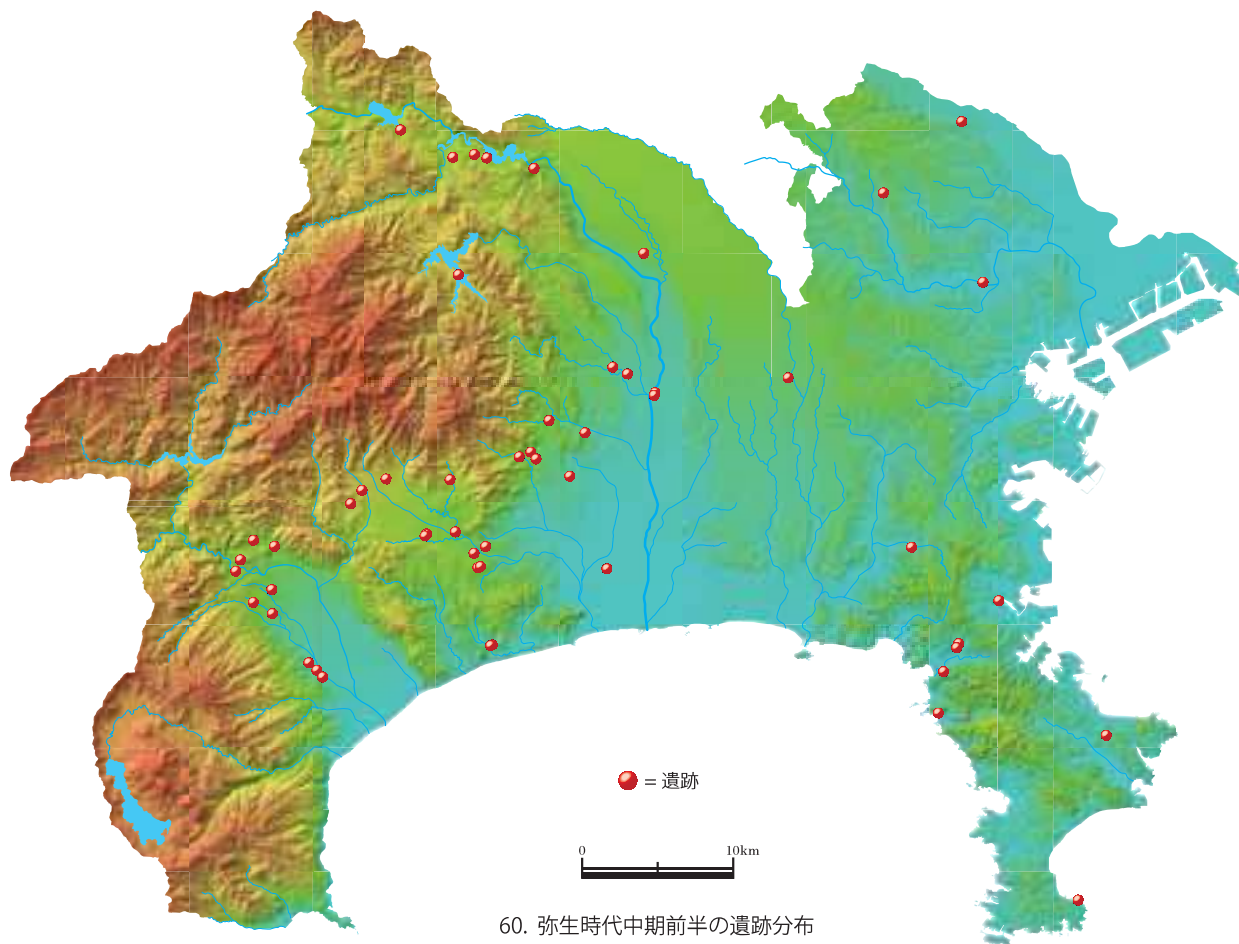
59. 縄文と弥生の転機における生活スタイルイメージ図

再葬墓を造営するという一連の行為は、祖先祭祀^{そぜんさいし}を目的とした葬送儀礼であった可能性があります。骨化した遺体を、土器に納め、土坑に埋納するという儀礼を通じて、集団同士の社会的なつながりを確認し、関係性を強めていたのでしょう。再葬墓の造営は、次の弥生時代中期前半にも引き継がれていきます。

VI. 縄文と弥生の転機— 弥生時代中期前半

弥生時代中期前半では前時期から継続して、東海地方に由来する条痕文土器、東北地方の影響を受けた沈線文や縄文で施文された土器が見られることに加え、両者の要素が融合した土器も現れるようになります。

この時期の遺跡分布は、弥生時代前期後半からあまり変化を見せません。そして、やはり確実な住居跡は発見されていません。ただ、関東・中部地方では住居跡がまとまって発見されている遺跡があることから、一部地域では集住化が進んでいたことが推測されます。



60. 弥生時代中期前半の遺跡分布



61. 新羽浅間神社遺跡出土の土器

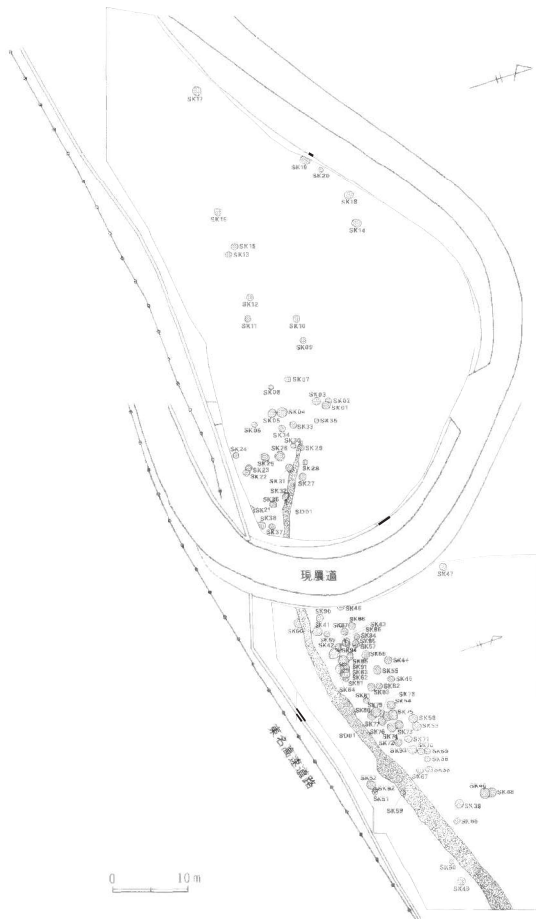


62. 堂山遺跡（山北町）出土の土器
山北町教育委員会所蔵

■雑穀栽培に励む

堂山遺跡（山北町）では、炭化したイネやアワ・キビなどが検出された中屋敷遺跡とおなじように多くの土坑が確認されました。土坑群の中には袋状を呈するものがあることから、一部は貯蔵用として利用されたのかもしれませんが。

この堂山遺跡から出土した打製石斧は、大形化していることが認められます。及川宮ノ西遺跡から出土した打製石斧にも同様の傾向が認められます。打製石斧の大形化は、地面を幅広く掘り起こし掻く耕作のために改良されたものとされ、その形状から石鋤とも言われます。



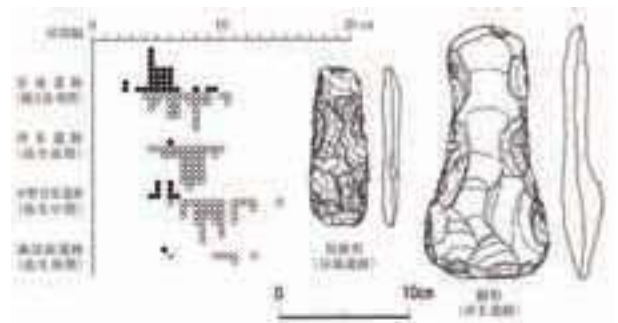
63. 堂山遺跡の遺構分布図



64. (上) 堂山遺跡の発掘調査風景と
(下) 出土した石鋤 山北町教育委員会所蔵

ほぼ同時期に集落が営まれた中野谷原遺跡（群馬県安中市）では、石鋤とともにアワやキビの土器圧痕が検出されています。神奈川県域では、今のところ弥生時代中期前半に相当する雑穀の圧痕は確認されていませんが、石鋤の存在や周辺の状況から、雑穀栽培を行っていたと推測されます。

遺跡名	発掘された 土器の種別	検出された 土器の数量	イネ	アワ	キビ	その他	その他	その他	その他	その他	その他
神奈川遺 下野	縄文後一前期前半	104	2								2
神奈川遺 下野B	縄文後一前期前半	98	3								3
神奈川遺 下野土坑	縄文後期中部	13	1								1
神奈川遺 上野	縄文後一前期前半	29	0								0
神奈川遺 上野B	縄文後期一弥生前期	116	13	1	1(1)						1, 1(2)
神奈川遺 下野地蔵	縄文後期前半一弥生前期	7	1	1							1
神奈川遺 美濃	縄文後期前半一弥生前期	4	1								1
神奈川遺 中野	縄文後期前半一弥生前期	9	1								1
神奈川遺 北野	縄文後期前半一弥生前期	36	7	2	2	2	1				1
神奈川遺 上野	縄文後期前半一弥生前期	21	1	1							1
神奈川遺 稲葉堂A	弥生前期	6	1	1							1
神奈川遺 稲葉堂B	弥生前期	4	0								0
神奈川遺 稲葉堂C	弥生前期	23	23								23
神奈川遺 中野山原	弥生中前期	148	17	3	10(2)	2(1)	20(4)	5(3)	1	1(1)	17
合計		647	113	4	15(2)	2(1)	25(5)	7(3)	1	1(1)	1



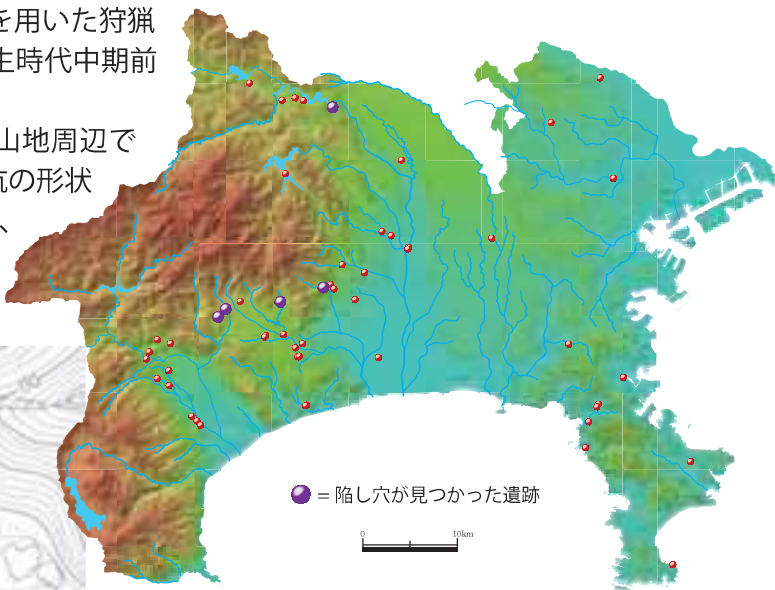
66. 打製土掘具の大きさの変化

65. 関東地方における穀物のレプリカ圧痕同定一覧

■狩猟に^{いそ}勤しむ

弥生時代前期後半に丹沢山地周辺で陥し穴を用いた狩猟が行われていたことが確認できましたが、弥生時代中期前半にも陥し穴は継続するようです。

遺跡の分布をみると、前時期と同様に丹沢山地周辺で陥し穴が掘られていることがわかります。土坑の形状も、前期後半を踏襲するように長方形を呈し、深く掘り込まれています。狩りの技が脈々と受け継がれていたことがうかがえます。



67. 弥生時代中期前半の陥し穴が見つかった遺跡の分布



68. 津久井城跡馬込地区（相模原市緑区）の土坑分布状況



69. 津久井城跡馬込地区のY4号土坑



70. 東田原象ヶ谷遺跡（秦野市）のY2号土坑イノシシ骨出土状況（左）と出土状況アップ（右上）及び接写（右下）

■^{つむ}紡ぎ続ける^{ちゆうたい}紐帯 — 再葬墓 —

弥生時代前期後半に祖先祭祀の場として利用されたと考えられる及川宮ノ西遺跡や新羽浅間神社遺跡では、弥生時代中期前半にも引き続き再葬墓が造営されます。さらに、この時期には再葬墓に関連すると思われる土器が数例確認されています。多くの土器は採集されたものであるため、出土状況の詳細は不明ですが、再葬墓をつくる行為は広く行われていたのでしょう。

これまでの経過を振り返ると、縄文と弥生の転機を生きた人々は、縄文時代以来の生活の知恵や技術を基盤としながら、新たに雑穀栽培に取り組み、日頃は離れて暮らしながらも、再葬墓造営を通じた祖先祭祀の際には、みんなが集まり、きずなを再確認し、社会的な紐帯を紡ぎ続けていた姿が浮かんできます。



71. 中野大沢遺跡（相模原市緑区）出土の弥生土器
相模原市立博物館所蔵 [相模原市指定有形文化財]



72. 遠藤原遺跡（平塚市）出土の弥生土器 平塚市立土沢中学校所蔵 [平塚市指定重要文化財]



73. 三ヶ木遺跡（相模原市緑区）出土の弥生土器 神奈川県立津久井高校所蔵 [県指定重要文化財]

VII. 縄文と弥生の“るつぼ” — 秦野市平沢同明遺跡 ひらさわどうめい

平沢同明遺跡は神奈川県西部の秦野盆地東南端に位置します。本遺跡では過去 10 年にわたって発掘調査が行われ、調査成果から、縄文時代中期後半から弥生時代中期前半に及ぶ非常に長い期間利用された地であったことがわかりました。そして、その期間の中で主体となる時期が縄文・弥生移行期になります。

浮線文土器、変形工字文をもつ土器、条痕文土器、遠賀川系土器、複数の文様要素が融合した土器といった県域で見られる土器の変化が、ほぼすべて確認できるといっても過言ではありません。

さまざまなルーツを持つ土器が共存する様相から、平沢同明遺跡は、「縄文」と「弥生」が入り混じった“るつぼ”であったといえます。いろいろな文化的・社会的背景をもった人々が、この地に往来し、交流を図っていたのでしょう。



74. 1号単独出土土器の出土状況



75. 2号埋設土器の出土状況

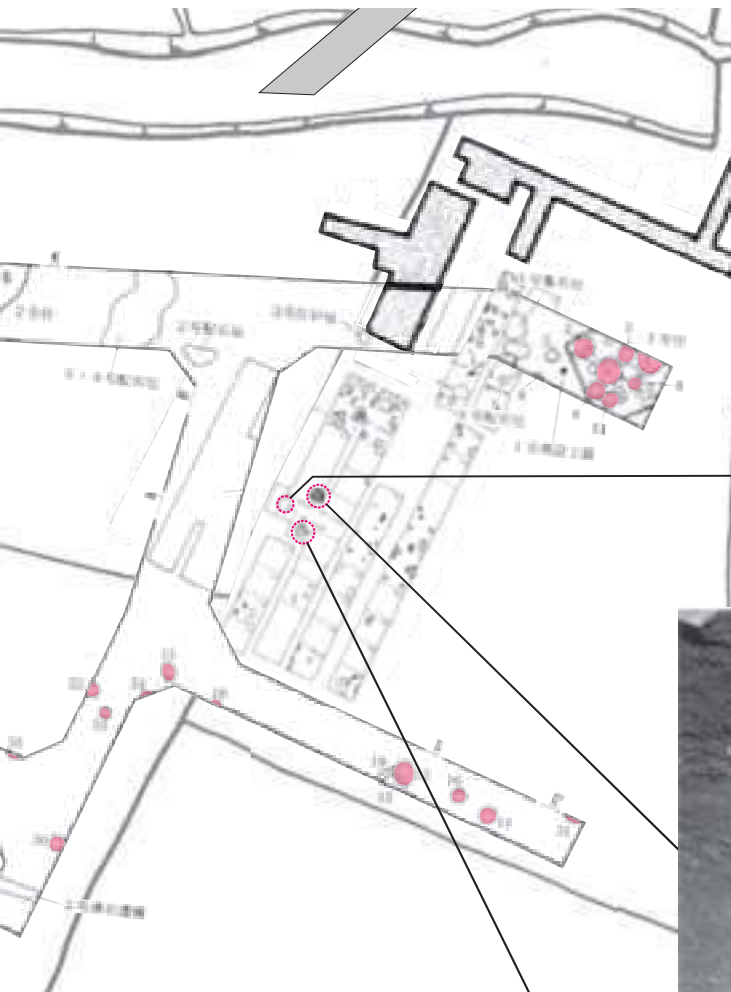
短期間のうちに居住の場を移すという縄文と弥生の転機における生活スタイルにあって、長い期間継続的に利用された平沢同明遺跡は、神奈川県域のみならず、関東・中部地方においても稀有な存在と言えます。

発掘調査が及んでいない地にも遺跡が展開していると考えられます。「縄文」と「弥生」という、時代と文化の転機を生きた人々の足跡は、今も地中に残されています。



77. 平沢同明遺跡

76. 平沢同明遺跡



78. K 5-b 土坑の土器出土状況



79. 遠賀川系壺形土器の出土状況



遺跡近景



■ 縄文時代晩期後半から弥生時代中期前半に属する土坑およびピット

0 30m

遺跡遺構分布図



80. K 5-c 土坑の土器出土状況

VIII. 弥生時代中期中頃の暮らし — 本格的な稲作農耕集落

弥生時代中期中頃を迎えると、暮らしの様相が一変します。弥生時代中期前半まで集落が形成されなかった状況から、突如として大規模な集落である中里遺跡（小田原市）が出現するのです。

中里遺跡は足柄平野の南東部に立地し、発掘調査の結果、集落域と墓域から構成される遺跡であることが明らかになりました。

蛇行する河道と、人工的に掘削された溝で画された空間に集落域が広がり、弥生時代中期中半の遺構として、竪穴住居跡 102 軒、掘立柱建物跡 73 棟、土坑 882 基、井戸跡 6 基などが確認されています。

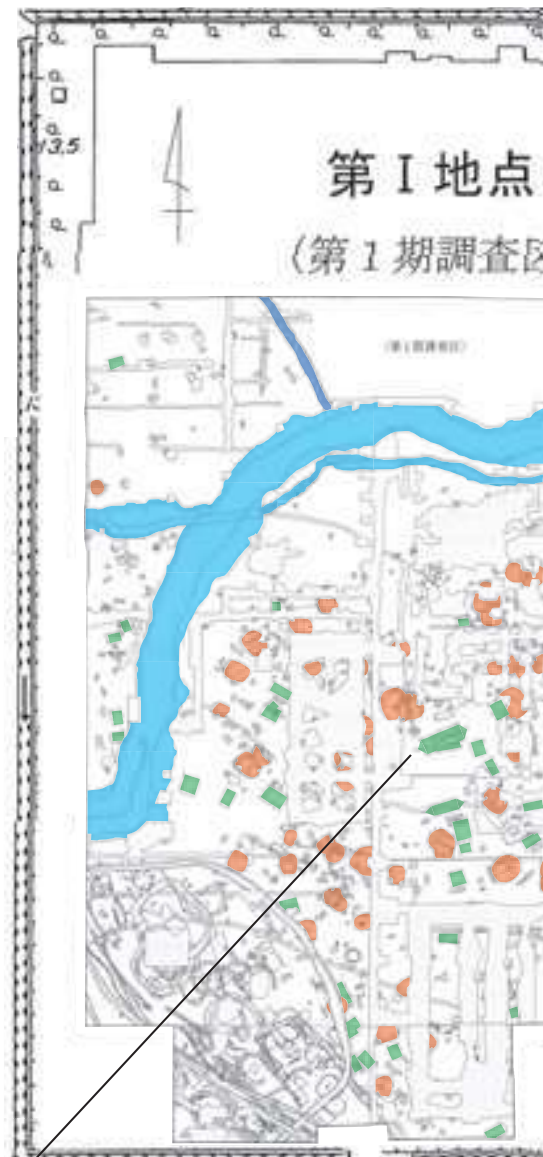
遺構群の中で集落域中央部付近の広場のような空間に位置する独立棟持柱建物跡は、集落のシンボルとも言える存在であったと考えられています。



81. 第Ⅰ地点全景



82. 集落域のほぼ中央に位置する独立棟持柱建物跡（20号掘立柱建物址）



【弥生時代中期中頃の遺構】

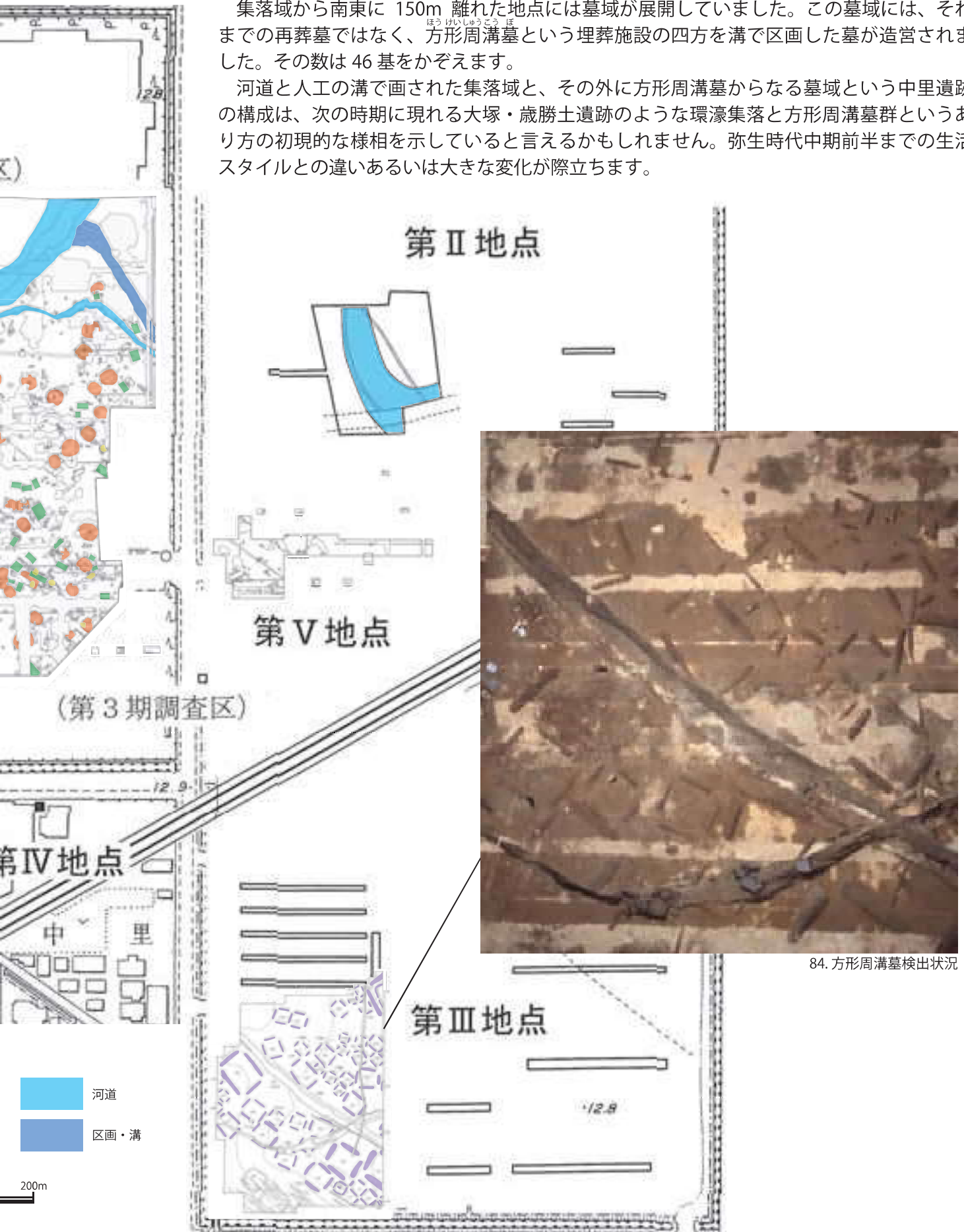
- | | |
|---|---|
| 住居跡 | 井戸跡 |
| 掘立柱建物跡 | 方形周溝墓 |



83. 中里遺跡

集落域から南東に 150m 離れた地点には墓域が展開していました。この墓域には、それまでの再葬墓ではなく、^{ほうけいしゅうこうぼ}方形周溝墓という埋葬施設の四方を溝で区画した墓が造営されました。その数は 46 基をかぞえます。

河道と人工の溝で画された集落域と、その外に方形周溝墓からなる墓域という中里遺跡の構成は、次の時期に現れる大塚・歳勝土遺跡のような環濠集落と方形周溝墓群というあり方の初現的な様相を示していると言えるかもしれません。弥生時代中期前半までの生活スタイルとの違いあるいは大きな変化が際立ちます。



84. 方形周溝墓検出状況

■中里式土器と外来系土器

中里遺跡からは多くの土器が出土しました。出土土器の主体を占めるのが、神奈川県西部域でつくられた中里式と呼ばれる土器群です。中里式土器は、前時期までに見られた土器の要素が変化しながら受け継がれて成立したものと考えられます。

地元でつくられた中里式土器に伴って、日本列島の各地から持ち込まれた土器も一定量見つっています。瀬戸内東部の土器が最も多く、他に伊勢湾周辺、尾張北部、北陸、中部、関東北部、東北南部の土器も出土しています。これらの土器は、形や文様だけでなく粘土も神奈川のものとは異なることから、各地でつくられた土器を携えて、それぞれの地より人々がやって来たのでしょう。

かながわの地に暮らした人々を中心に西日本を始めとする日本各地から到来した人々との交流のもと、集落が営まれていたと言えるかもしれません。

85. 中里遺跡より出土した土器 小田原市教育委員会所蔵
[県指定重要文化財]



■本格的な稲作農耕の始まり

中里遺跡からは水田跡そのものは発見されていませんが、水田稲作を行っていたことを強くうかがわせる遺物が出土しています。弥生時代中期前半のものよりも大型化した石鍬が見つかっており、農耕具として使用されたと考えられます。

また、大陸系磨製石器と呼ばれる石斧類（大型蛤刃石斧＝伐採具、柱状片刃石斧・扁平片刃石斧＝加工具）も出土しており、木製農工具を集落で製作していたことが推測されます。実際、河道から木製の鍬が発見されています。

これらの石器や木製品とともに、土坑からは炭化米が多量に検出されており、自然堤防上に集落を営んでいた中里の人々は、その周囲で稲作農耕を行って生活していたのでしょう。



86. 石鍬 小田原市教育委員会所蔵 [県指定重要文化財]



87. 柱状片刃石斧 小田原市教育委員会所蔵 [県指定重要文化財]



88. 扁平片刃石斧 小田原市教育委員会所蔵 [県指定重要文化財]



89. 両刃石斧 小田原市教育委員会所蔵 [県指定重要文化財]



90. 木鍬 小田原市教育委員会所蔵 [県指定重要文化財]



91. 炭化米 小田原市教育委員会所蔵

IX. 土偶に見る縄文と弥生の転機

縄文と弥生の転機を生き延びた人々は、縄文時代以来の知恵や技術を基盤として自然環境の変化に対応し、雑穀栽培という新たな生活の術を取り入れ、小規模な集団に分散して生活の場を移しながら暮らしていました。そして、再葬墓の造営を通じて社会的な紐帯を保つという社会生活のスタイルは、環状集落が形成された縄文時代の社会から変化していることがうかがえます。

その変化は土偶のあり方にも影響を与えました。中屋敷遺跡から出土した弥生時代前期後半の土偶形容器は胸の表現があることから、縄文時代の土偶と同じく女性を表していることがわかります。しかし、その用途に違いが見られます。

縄文時代の土偶は、主に豊穰^{ほうじょう}や多産を祈る祭祀儀礼に使用されていたと考えられています。それに対し、中屋敷遺跡の土偶形容器は、頭頂部の開口部に新生児の骨片が収められていました。つまり、蔵骨器として用いられたのです。

両者は同じように女性を表徴した姿でありながらも、縄文と弥生の転機の中でその役割が移り変わっていきます。雑穀栽培を取り組むことに伴い生じた社会の変化が、土偶のあり方に影響を与えたと言えるかもしれません。



92. 上土棚南遺跡出土の土偶 綾瀬市教育委員会所蔵
[綾瀬市指定文化財]



93. 菩提横手遺跡（秦野市）出土の土偶
かながわ考古学財団保管



94. 中屋敷遺跡出土の土偶形容器 個人蔵
[国重要文化財]



95. 中里遺跡出土の有髭土偶 小田原市教育委員会所蔵

■ 挿図の典拠および写真の提供

本図録に掲載した挿図の典拠および写真の提供先について、神奈川県教育委員会所蔵のものは略しました。

[写真]

- 2・3：公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター提供、8・9・10・92：綾瀬市教育委員会提供
12・36・93：公益財団法人かながわ考古学財団提供、13・72：平塚市教育委員会提供、16・17：川崎市教育委員会提供
18：早稲田大学津八二記念博物館提供、24：埼玉県立さきたま史跡の博物館提供、25：公益財団法人茨城県教育財団提供
27・28：新潟市文化財センター提供、29・30：公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団提供、31・71：相模原市教育委員会提供
32下・33下：設楽博己氏提供、51・52(上・左下)：昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科提供、55：安藤広道氏提供
57：厚木市教育委員会提供、62・64：山北町教育委員会提供、74・75・78・79・80：秦野市教育委員会提供
81・82・84：玉川文化財研究所提供、85・86・87・88・89・90：小田原市教育委員会提供、94：神奈川県立歴史博物館提供
※26・32上・33上・52(右下)・77：担当者撮影

[挿図]

- 11：『綾瀬市史9 別編 考古』『上土棚南遺跡第3次調査』『上土棚南遺跡 第5次～第7次調査の記録』掲載図をもとに作成
14：文献13 掲載図を転載、15：『下原遺跡—縄文時代晩期、弥生時代後期、古墳時代前期の集落址の調査—』掲載図を一部改変
50：『神奈川県足柄上郡大井町中屋敷遺跡第9次発掘調査概報』掲載図を一部改変、63：『カラス山・堂山遺跡』掲載図を一部改変
65・66：文献18 掲載図を転載、76：『同明遺跡』『平沢同明遺跡発掘調査報告書』『平沢同明遺跡9301地点』掲載図をもとに作成
83：『中里遺跡第III地点発掘調査報告書』『中里遺跡発掘調査報告書』掲載図をもとに作成
※4・5・6・19・21・34・43・53・60・67・85の地図は電子国土基本図をもとに作成

■ 主な参考・引用文献 (報告書の掲載は割愛しています)

1. 綾瀬市 2002『綾瀬市史5 通史編 原始・古代』
2. 阿部 昭典 2008『縄文時代の社会変動論』未完成考古学叢書⑥
3. 石川 日出志 2010『農耕社会の成立』シリーズ日本古代史① 岩波書店
4. 石川 日出志 2010『縄文時代の終末』『縄文時代の考古学1 縄文文化の輪郭—比較文化論における相対化』同成社
5. 井上 慎也 2014『群馬県横野台地における農耕開始期の集落構造について』『法政考古学』第40集
6. 神奈川県考古学会 2008『平成19年度考古学講座 新神奈川・新弥生論』
7. 小林 青樹 2004『農耕開始期の居住システムと住居構造—中部高地・関東を中心に—』『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第12集
8. 小林 達雄編 2008『総覧 縄文土器』
9. 国立歴史民俗博物館 2007『弥生はいつから!?—年代研究の最前線—』
10. 相模原市教育委員会 2016『津久井町史 通史編 原始・古代・中世』
11. 佐々木 由香 2007『種実と土木用材からみた縄文時代中期後半～晩期の森林資源利用』『縄文時代の社会考古学』
12. 佐々木 由香 2009『縄文から弥生変動期の自然環境の変化と植物利用』『季刊東北学』第19号
13. 佐々木 由香・工藤 雄一郎・百原 新 2007『東京都下宅部遺跡の大型植物遺体からみた縄文時代後半期の植物資源利用』『植生史研究』第15巻第1号
14. 設楽 博己 2006『弥生時代改訂年代と気候変動—SAKAGUCHI1982論文の再評価』『駒沢史学』駒沢史学会
15. 設楽 博己 2006『関東地方における弥生時代農耕集落の形成過程』『国立歴史民俗博物館研究報告』第133集
16. 設楽 博己 2014『農耕文化複合と弥生文化』『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集
17. 設楽 博己 2014『日本歴史 私の最新講義 縄文社会と弥生社会』敬文舎
18. 設楽 博己 2017『弥生文化形成論』塙書房
19. 設楽 博己編 2017『季刊考古学第138号 特集 弥生文化のはじまり』
20. 設楽 博己・高瀬 克範 2014『西関東地方における穀物栽培の開始』『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集
21. 杉山 浩平・金子 隆之 2013『縄文時代後晩期の伊豆・箱根・富士山の噴火活動と集落形態』『考古学研究』第60巻第2号
22. 谷口 肇 1991『神奈川「宮ノ台」以前』『古代』第92号
23. 谷口 肇 1993『弥生文化形成期における相模の役割』『古代』第95号
24. 谷口 肇 1996『ポスト浮線紋—神奈川周辺の状況—(その1)』『神奈川考古』第32号
25. 中沢 道彦 2015『長野県域における縄文時代の終末と生業変化』『シンポジウム八ヶ岳山麓における縄文時代の終末と生業変化』
26. 前山 精明 1996『縄文時代晩期後葉集落の経済基盤—新潟県御井戸遺跡出土植物性食料残渣の計量分析から—』『考古学と遺跡の保護 甘粕 健先生退官記念論集』
27. 松木 武彦 2007『日本の歴史 第1巻 列島創世記』小学館
28. 森岡 秀人・中園 聡・設楽 博己 2005『稲作伝来』先史日本を復元する4 岩波書店
29. 横浜市歴史博物館 2008『特別展 縄文文化円熟—華蔵台遺跡と後・晩期社会—』
30. 横浜市歴史博物館 2017『平成29年度企画展 横浜に稲作がやってきた』

■ 協力機関・協力者 (順不同、敬称略)

川崎市教育委員会、相模原市教育委員会、平塚市教育委員会、小田原市文化財課、茅ヶ崎市教育委員会、逗子市教育委員会
秦野市生涯学習課、厚木市教育委員会、南足柄市文化スポーツ課、山北町教育委員会、公益財団法人かながわ考古学財団
公益財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 横浜市歴史博物館、公益財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター
川崎市市民ミュージアム、相模原市立博物館、平塚市立土沢中学校、茅ヶ崎市郷土資料館、池子遺跡群資料館、あつぎ郷土博物館
南足柄市郷土資料館、神奈川県立津久井高等学校、東村山市教育委員会、東村山市立八国山たいけんの里、埼玉県立さきたま史跡の博物館
公益財団法人茨城県教育財団、公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団、新潟市教育委員会、早稲田大学津八二記念博物館
慶応義塾大学、明治大学博物館、青山学院大学、昭和女子大学、東海大学校地内遺跡調査団、國學院大學栃木学園参考館、玉川文化財研究所
佐々木由香、設楽博己、中村大介、安藤広道、小宮真也、杉山博久、杉山浩平

縄文

と
弥生

令和元年度 かながわの遺跡展

縄文と弥生—時代と文化の転機を生きた人々—

発行日 令和元年 11 月 20 日

編集 神奈川県教育委員会教育局生涯学習部

文化遺産課中村町駐在事務所（神奈川県埋蔵文化財センター）

発行 神奈川県教育委員会

印刷 株式会社エスピーアール